

て考えると、いさか物足りない点が多い。第一に検索表がないのは、致命的である。標本を生きている状態で観察すれば、カラー写真と種の説明で査定できるのだが、固定標本を調べる場合には本書の情報だけでは不十分である。多くの魚類研究者にとって、固定標本の査定は避けて通れない道なのであるから、検索表はぜひ欲しかった。前述の1975年の本には検索表があっただけに残念に思う。

また、属の説明が巻末の valid species の部分にまとめられているが、使いづらい。説明も簡単で、図もついておらず、本書だけで属を査定するのは容易ではない。また、valid species のシノニムリストはあるが、引用文献が不完全でシノニムリストから原記載論文を搜すことができない。これではシノニムリストをつけた意味が半減してしまう。本書を一般の熱帯魚愛好者に購買してもらうことを出版社が優先したことは容易に想像できる。そのために、このように不完全で、なんとも歎かゆい状態を目にするのは、著者の人柄と仕事ぶりを知るだけに残念である。彼にとって引用文献をつけるのは容易だったはずだからである。

新種を本書に含めたのは賛成できる行為ではない。単行本は後の時代になると入手しにくい。したがって、原記載を掲載する出版物としては向きである。もはや19世紀ではないのだから、新種を単行本に載せるようなことはすべきではない。新種の写真と簡単な説明が、本の前半に出ているが、他の種の中に挿入されているので、注意しないと新種とは分からず、新種であるという表示（例えば new species とか sp. nov.）がつけられていないのである。もちろん、本の後半にある新種の記載の部分では、new species と明記してある。16新種のうち15種は著者が記載し、1種 *Amphiprion omanensis* は著者と Mee の共著となっている。この新種の写真と簡単な説明が47ページにあるが、なんと著者が Allen und Mee となっている。ドイツから出版したといつても、これはもちろん Allen and Mee の誤植である。

本書は限られたスペースに多くの情報を詰め込もうとしただけに、上記のような欠点もある。しかし、価格は適切であり、サンゴ礁性魚類の分類・生態にたずさわる者にとって必携の書である。

(松浦啓一 Keiichi Matsuura)

会員通信・News and Comments

ISH Ichthyology Department and Collection Dissolved with End of 1992

Following our circular letter of early 1992, this is the official notification that by decision of our Federal Ministry of Agriculture, Food and Forestry:

- 1) the ISH ichthyology branch at the ZMH will be closed down and remaining staff move back to ISH headquarters;
- 2) the research field systematic ichthyology will not be continued at ISH;
- 3) the ISH fish collection will be handed over to the ZMH as future responsible holder valid from 31 December 1992 onward.

Please address your loan requests for former ISH material from January 1993 onward exclusively to: Prof. Dr. H. Wilkens, Kustos Ichthyologie, Zool. Museum Universität, Martin-Luther-King-Platz 3, D-2000 Hamburg 13.

As we have been unable to finish the collection inventory prior to the transfer date, please allow a couple of transitional months before requesting again for loans of former ISH holdings. Also, kindly be aware that even for a longer period there may be problems in serving loan requests promptly due to logistic difficulties and shortage of staff at the ZMH ichthyology.

New (old) address of former ISH ichthyology staff valid from January 1993 on: Institut für Seefischerei, Bundesforschungsanstalt für Fischerei, Palmaille 9, D-2000 Hamburg 50.

Being forced to say good-bye to the international community of active marine ichthyologists, we would like to thank all of you concerned for about 40 years of successful and stimulating cooperation in our joint field of research. We are also grateful to those of you, who greatly assisted us by returning their loans promptly. May better times be ahead!

(Matthias Stehmann and Alfred Post)

Symposium on Evolution, Systematics, and Biology of Chondrichthians

This symposium is to be held at the Fourth Indo-Pacific Fish Conference 28 Nov. to 4 Dec. 1993 in Bangkok, Thailand.

As distributed with the First Announcement of autumn 1991 and the First Circular of early 1992 for the 4th IPFC, this subject will be one of eight major conference symposia planned. Dr. Gruber and I have been invited by Prof. Monkolprasit to organize the chondrichthyan symposium. In agreement with her, the title was slightly modified in replacing Behavior by Biology, and we propose the follow-

ing subheadings to be emphasized during special sessions:

- 1) Deep-water chondrichthyans in Southeast Asian waters, around Australia and New Zealand.
- 2) Advances in the biology of deep-water chondrichthyans.
- 3) Exploitation of elasmobranchs in the northern Indian Ocean, off Southeast Asia and North Australia, and conservation measures eventually required.

Oral contributions and posters on one or more of these topics are invited, as well as on general subjects. To assist us in organizing and coordinating our symposium, please provide a copy of your abstract to Sonny Gruber and/or me when submitting to Bangkok your official form of the 2nd Circular. Please contact: Dr. Matthias Stehmann, Institut für Seefischerei, BFA für Fischerei, Palmaille 9, D-2000 Hamburg 50, Germany—and—Dr. Samuel H Gruber, Rosenstiel School of Marine & Atmospheric Sciences, Division of Marine Biology & Fisheries, 4600 Rickenbacker Causeway, Miami, FL 33149-1098, USA.

(Matthias Stehmann)

液浸標本用ラベルのコンピューターによる作成方法

耐水紙と耐アルコール性プリンターリボン

How to Produce Computer-printed Wet Labels

液浸標本を管理するときに、どのような材質のラベルを使うべきであろうか。この問題は常に博物館のキュレーターを悩ませてきた。欧米の博物館のラベルを見ると、それぞれのキュレーターがラベルに工夫を凝らしている様子がわかる。さて、コンピューターの登場によって、また新たな問題が生じてきた。大量の標本データをどのような紙に印刷したらよいのか、印刷の形式はどうすべきか、プリンターはどのような機種を選べばよいのか、そしてドットマトリクスインパクト方式のプリンターを使用する際にはどのようなプリンターリボンを使えばよいのかという問題である。

コンピューターを使うからには、標本のデータを入力する手続きは1回で完了し、後にそのデータを様々な形で出力して利用したいものである。コンピューターを使いながら、台帳やラベルを手で書いていたのでは効率的なコンピューターの使い方とは言えないであろう（もちろん過渡期にはこのような状態も生じる）。そこで、ラベルやプリンターリボンが大問題となるのである。ここ数年、この問題の解決に努めてきたが、満足できる段階に到達できたので報告する。

耐水紙 国立科学博物館では、以前から耐水紙を標本

びんの中に入れるラベルとして使用していた。このラベルは横林社から購入した。連絡先は以下に示した。担当者名も記したが、会社名のみでも連絡にさしつかえはない。

連絡先: 〒105 東京都港区浜松町1-2-15 横林社(担当
当: 大貫俊隆)
TEL 03-3431-1774 FAX 03-3431-1465

耐水紙の大きさは注文によって自由に変えられるので、使いやすい大きさにすればよい。コンピューターによる出力ではなく、手書きによる通常のラベルとして使いたい場合には、採集地や採集者、採集年月日、学名などの見出しを印刷してもらうこともできる。単価は注文する枚数によってかなり異なるが、一度に注文する量が多いければ安くなる。国立科学博物館ではコンピューター導入以前に2種類のラベルを購入した。一つは通常のラベルであり、もう一つは標本びんの中に入れるメモとして使う小型のラベルである（貸与、交換、査定変更などを記入する）。

コンピューターのデータを出力するためのラベル用紙は、1枚の大きさがA4判である。この中に3件分のデータを印刷するようにした。標本管理用にデータベースソフト「桐」(Ver. 4.0)を用いているので、帳票形式(カード形式)で印刷できる。印刷した後、はさみやカッターでラベルを3分割して標本びんの中に入れる。A4判にした理由の第一は、この幅があればラベルを標本びんの中に入れても倒れず、外から見えてるので標本びんの外側に別のラベルを貼る必要がないこと。第二の理由は全てのデータを出力できるからである。ラベルを巻き込むようにすれば、140ccの標本びんにも入り、科コード、標本番号、学名などの最小限必要な項目は標本びんの外から見ることができる。梅酒びんや塩化ビニール性の2リットルびんに入れてもラベルは倒れず、具合いがよい。

使用しているプリンターは、エプソンのVP-1000(カットシートフィーダー使用)である。ミシン目をつけた連続紙を特注することも考えたが、紙の無駄が多いこと、単価が高くなることを考慮して、A4判に切断した紙を使用することにした。紙の大きさは印刷する項目数によってかなり異なるであろう。国立科学博物館では50項目のデータが入力されているため、A4判にしたが、B5判1枚に2~3件分のデータを印刷した場合でも、相当数の項目をラベルの中に入れることができる。ただし、B5判より幅が狭いと塩化ビニール性の2リットル標本びんなどにラベルを入れた際に、中で倒れてしまうであ

ろう。また、ラベル1枚の高さは、A4判用紙を縦に3分割したものとなるが、余白を切り取っても問題はないので、実際にはもう少し低くなる。1枚のラベルが高くなり過ぎると小さな標本びんに入れるとときに不便であるから、この点にも注意が必要である。

耐アルコール性プリンターリボン 筆者は世界各国の博物館のラベルを調べた結果、アメリカとオーストラリアで耐アルコール性プリンターリボン入手できることを確認した（ヨーロッパでも入手可能であろう）。いくつかの博物館と連絡をとった結果、アメリカの会社のプリンターリボンを使用することにした。このプリンターリボンは、ワシントンの国立自然史博物館で使用しているものと同じである。発注先は下記に示した。

担当者：Mr. Charles Chapman (Sales Representative)

会社名：Automated Office Products, Inc.

住所：9700-A Martin Luther King, Jr. Hwy.

Lanham, Maryland 20706, USA

ドットマトリクスインパクト方式のプリンターならば、どの機種でも問題はない。上記の会社に見本としてプリンターリボンをカセットごと1本送れば、それに合わせてリボンを作成し、新しいカセットに入れた状態で納品してくれる。エプソン VP-1000 の場合には、リボン1本（カセット入り）が10ドルであった（1回の注文数は40本であったが、少量でも受け付けてくれるであろう）。この価格は国内の通常のプリンターリボンよりも安い。このことがわかつてからは、国内で作成されたプリンターリボンは一切使っていない。通常の文書をドットマトリクスインパクト方式で出力するときには、国内の高いプリンターリボンを使う気にはならないからである。ラベルに印刷した文字は、アルコールに入れるとかすかに溶けるようであるが、薄くなることもなく全く問題はない。この会社は、もし問題がある時には製品を取り替えると豪語しており、かなりの年数使用しているワシントンでも問題はないようであるから、信頼できそうである。とはいっても安全弁は必要である。ラベルの他に番号札（布にナンバーリングで登録番号を印字して、コロジオンの皮膜をかぶせたもの）を標本びんに入れて万に備えている。

レーザープリンターの問題点 レーザープリンターは印字がきれいで、印刷速度も速いという優れた機能をもっている。ラベルを印刷する際にも、デザインを工夫できるし、利点も多い。実際に、レーザープリンターをラベル印刷に使用している博物館（フィラデルフィアの

科学アカデミーやミシガン大学の動物学博物館など）もある。しかし、筆者が得た情報によると、液浸標本用のラベル印刷には不向きのようである。

レーザープリンターで印刷したラベルを筆者が見たのは、フィラデルフィアの科学アカデミーであった。フィラデルフィアでは、レーザープリンターで厚い紙に印刷した後、アクリルコートをスプレーでラベルの上にかけて標本びんの中に入れていた。フィラデルフィアの魚類部門の人たちは、この方法で作成したラベルは読みやすく、便利であると力説していた。筆者が、「レーザープリンターで印刷すると、文字がはげ落ちるのではないか」と質問すると、「アクリルコートをかけているから問題はない」と言っていた。「数年経過しても特に問題は生じていない」というのである。確かに、フィラデルフィアのラベルはスミソニアンやサンフランシスコの科学アカデミーの機能一本槍のラベルと比べると、デザインもよく、読みやすい。

しかし、やはり欠陥があった。脂肪分の多い標本（例えばサメ類）をアルコールに漬けておくと、脂が溶け出してくる。このような液の中に、レーザープリンターで印刷したラベルを入れておくと、ラベルが何かに触れたときに、文字が剥離してしまうのである。アクリルコートをかけても、剥離するまでの時間が遅くなるだけで、本質的な解決には何の役にも立たない (Curation News Letter, No. 10, Spring 1990)。通常のアルコールに保存された標本と一緒に入れられたラベルでは、このような問題は生じていないが、ミシガン大学では当面レーザープリンターによるラベル印刷は中止したそうである。

一口にレーザープリンターといっても、機種によって印刷方法は異なる。多くの機種では150度前後の熱によってトナーを紙に印刷している。この際、トナーに圧力をかけて、紙に押しつけてはいない。したがって、アルコール液に入れた場合、剥離しやすいわけである。これに対して、トナーを約400度の高温で、しかも高圧をかけて、紙に印刷する機種もある。しかし、いわゆる通常のデスクトップタイプのレーザープリンターは、この方法を用いていない。したがって、今のところレーザープリンターを液浸標本用のラベルに使用するのは、相当危険である。

これに対して、ドットマトリクスインパクト方式のプリンターは、染料を混合したカーボンを紙に打っていくので剥離しにくい。昔、タイプライターのインクリボンで作成したラベルの文字が、アルコール液につけても消えなかつたのを覚えている会員もいることであろう。ただし、国内で入手できる通常のプリンターリボンは染料

が多くて、カーボンの量が少なく、アルコール液に入ると、印刷した文字が短時間に薄くなり、実用に耐えない。

筆者の現時点の結論としては、以下の方法をおすすめする。1) ドットマトリクスインパクト方式のプリンターを使用する、2) 耐アルコール性プリンターリボンを使

う、3) ラベルが万一破損したときに備え、登録番号など標本のデータを引き出すことのできる情報を標本びんの中に入れておく（布製、金属製、もしくはプラスチックなどの番号札）。

（松浦啓一 Keiichi Matsuura）

会記・Proceedings

1992年度第2回役員会

1992年9月8日（火）、於東京水産大学資源育成学科会議室

出席者：岩井、沖山、新井、松浦、多紀、佐野、富永、藤田。

- 前回議事録の確認。
- 報告事項 会長：日本動物学会から動物科学研連委加盟学会宛に同学会の社団法人化に対する賛同を求められ、副会長と相談の上、同意書に署名し、返送した。編集：新編集委員会発足後、投稿状況は5ヶ月で28篇で編集作業も順調。39巻2号の掲載論文は9篇、手持ち原稿52篇。編集主任が39巻3号から多紀氏（東京水産大学）から宮氏（千葉県立中央博物館）へ引き継がれる。庶務：文部省の平成4年度の科研費補助金は210万円。学術会議水産研連主催のシンポジウム「地球環境と水産業」の共催を承諾した。学協会著作権協議会と権利委託契約をし、権利委託手数料（2,060円）の支払い手続きをした。1993年度の年会時に開かれる編集委員会、評議員会の日程変更（研究発表の前日開催）を両委員会委員に通知した。
- 1993年度の海外向け購読料を1ドル130円のレート設定から125円にすると決定した。
- 1993年度年会および会告について検討した。
- 魚類学雑誌の総目録作成委員の富永氏から、総索引（author index, new taxon index, タイトルに基づくsubject index）は全体で134頁となり、近日中に印刷へ回す旨、報告があった。
- その他、学術会議水産研連主催のシンポジウム「地球環境と水産業」が8月7日（金）、日本学術会議で開催された。

日本学術会議だより No. 27 (1992年11月)

日本学術会議第115回総会（第15期・第4回）が10月21日～23日の3日間開催された。

総会の初日には、会長からの前回総会以降の経過報告

に統いて、運営審議会附置委員会、部会、常置委員会、国際対応委員会、特別委員会の各委員長、部長からの報告があった。また、本年9月27日から10月11日までの間、二国間学術交流委員会の代表団がアメリカ合衆国を訪問し、アメリカ合衆国の学術の現状を観察するとともに、大統領補佐官を始めとする連邦政府機関の関係者、国立科学財團の関係者、その他関係機関の関係者との意見交換を行い、多大なる成果が得られたとの訪米報告が行われた。午後からは各部会が開催され、国際対応委員会や研究連絡委員会の在り方等について審議が行われた。なお、二国間学術交流の成果等に関する「平成4年度日米学術交流について」の会長談話を21日付けで発表した。

総会2日目には、学術分野における国際貢献に関しての自由討議が行われ、国際貢献の意義、方針等について活発な討議が行われた。本件については、日本学術会議第15期活動計画の中に重点目標として掲げられており、また、昨年秋の第113回総会において内閣官房長官から、学術研究の分野で我が国がどのような国際的貢献をなすべきかについて全学問領域から総合的に検討し、意見を出すよう求められ、以来、日本学術会議としては重要な案件として審議してきたものである。午後からは、米スペースシャトル「エンデバー」で微小重力実験に取り組んだ毛利衛さん、向井千秋さん、土井隆雄さんの三宇宙飛行士を招き、実験成果等の報告をしていただくとともに会員との意見交換が行われた。なお、「学術分野における国際貢献について」の会長談話を22日付けで発表した。

総会3日目には、文化としての学術特別委員会を始めとする各特別委員会、各常置委員会が開催された。

会員異動 (1992.4.1-11.30)